

「われわれ自身，＜原子力時代＞をどのように理解してきたのか？」
—Th.リットの「時局的論文」（1957年）の考察—

小 笠 原 道 雄

How Have We Understood “the Atomic Age”?
Considering Theodor Litt’s Paper Responding to a Current Social Issue (1957)

Michio Ogasawara

“The Atomic Age. Maximum of Science and Technology. Maximum for Responsibility.” This is the theme of the 15th symposium held in the late October 2011 by Theodor-Litt -Institute of Leipzig University. The theme was decided for the paper, “Wie versteht unser Zeitalter sich selbst?” (“How is our age itself understood?”) that Theodor Litt (1880–1962) had given in the conference, “Current Fatal Problems,” held in 1957 by the Department of Defense of the federal government of the former West Germany.

The paper was a result of his vigorous dialogue with W. Heisenberg, the Nobel prize laureate for Physics in 1932, about various issues. It reflectively and quite dispassionately criticizes the utilization of the “atomic power” that would be positively accepted to the German society afterwards. He maintains his attitude not with “mythos and pathos” but with “logos and ethos.”

In the following, this paper will analyze and characterize Litt’s “thinking” in his responding to the social issue, and elucidate what solution he obtained out of his dialogue with Heisenberg who was a Kantian as well.

The outline of the study is : Introduction ; 1) The political Background of a ‘Current Social issue’ (1957) by Th. Litt ; 2) The Position of a ‘Current Social issue’(1957) by Th. Litt’s works ; 3) Analyses of the Thought and Logic of Th.Litt’s ‘Current Social issue’(1957) ; 4) Conclusion.

キーワード

テオドール・リット Theodor Litt, ウエルナー・ハイゼンベルク W. Heisenberg
原子力時代 the Atomic Age, 時局論文 (1957) Current Social issue (1957)

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

はじめに

2011年10月下旬開催された、ライプチヒ大学 Th. リット研究所主催の第15回国際シンポジウムのテーマは「原子力時代。自然科学と技術の極大値。最高値の責任。」というもので、本テーマは、1957年、テオドール リット (Th. Litt, 1880–1962) が旧西ドイツの連邦政府国防省主催の会議『現代の運命的諸問題』で報告した「わ

れわれ自身，この「(原子力) 時代」をどのように理解してきたのか?¹⁾ から設定されたものである。

テーマ設定の中で、明らかになったことは、この報告が、リットがライプチヒ大学の哲学と教育学の教授及び学長時代 (1920～1936)、同僚の物理学者 W. K. ハイゼンベルク (Werner Heisenberg, 1901–76, 量子力学等の研究で1932年ノーベル物理学賞受賞) と精力的に、かつ多

様な問題について対話し、その後、ドイツ社会で積極的に、支持されることになる「原子力時代」に対して、反省的に、その実施を極めて冷静に批判的に論述していることである。W. ハイゼンベルクが広島原爆投下の第一報に接し、「私は初めこのニュースを信じようとしなかった」²⁾と強い懐疑と激しい動揺を示したのに対して、リットの報告には、時間的なズレはあるが、特に、1945年8月6日と9日の広島、長崎への原爆の投下からの悲惨な体験や教訓を通じた情動的な残響は見られない。そこには「神話(ミュートス)と激情(パトス)」ではなく「論理(ロゴス)と倫理性(エートス)」³⁾に徹するリットの基本姿勢が貫かれているのである。

以下、本稿では、Th. リットのこの「時局論文」にみられる思考と論理の特徴を中心に考察し、特に、物理学者であると共に、カント哲学者でもある W. ハイゼンベルクとの「対話」から導かれたと思われる問題解決の筋道を解明する。

1. 時局論文：「われわれ自身、＜原子力＞時代をどのように理解してきたのか？」(1957年)の時代背景⁴⁾

1) 本論文の発表された時代背景として記憶されねばならぬことは、当時の西ドイツのおかれていた「外交と国際政治」上の状況である。具体的には、ヨーロッパ共同市場 (EEC) 及びヨーロッパ原子力共同体 (ユートラム EAG) 関係条約 (ローマ諸条約) の調印 (1957. 3. 25)。物理学者18名の「ゲッチング宣言」及び核武装計画反対と核兵器の製造実験への参加拒否 (4. 12)。ベルリンにて西側三カ国とのドイツ統一要綱 (ベルリン宣言) 調印 (7. 29)。そして翌年1958年1月1日、ヨーロッパ原子力共同体発足、3月25日には連邦議会が国防軍の核武装決議案を可決する一連の「運命的諸問題」である。このような時代的背景のもと、「政治的一歴史的陶冶のハンドブック」として、ドイツ連邦国防省の編纂で論文集『現代の運命的諸問題』(1957)は二巻本として刊行される。その「序言」で、連邦国防大臣 F. J. シュトラウス (Strauss) は「将来への方向を示す現代の運命的諸問題は過去の認識を欠いては把握出来ない。政治的存在としての人間は、共同体による、共同体のために設定された諸要求を満たすための歴史的知を必要とする」⁵⁾と述べている。そ

のために、単に「国防軍の兵士」⁶⁾だけではなく、「市民」にも「政治的一歴史的陶冶」が必要なことを訴えている。その巻頭を飾っているのが Th. リットの論文なのである。

2) Th. リットの著作(特に、論文)における「時局論文」(1957年)の位置

今日の Th. リット研究においては、第二次世界大戦後、とりわけ、1947年以降、旧西ドイツ・ボン大学に招聘されてからのリットの研究上の関心は、「もっぱら、当面する教育的現実の基本問題の解明とその解決に向けられる」⁷⁾。これらは一般には、リットの「後期思想」と特徴づけられる諸課題である⁸⁾。具体的には、ドイツ国民の『政治教育の問題』と組織化された現代社会における『科学技術と人間陶冶』の問題であった。これらの問題を論究している著作(講演等を含む)を今ここで年代順にあげれば、(1)『ドイツ国民の政治的自己教育』(1954)、(2)『ドイツ古典主義の陶理想と現代の労働世界』(1955)、(3)『技術的思考と人間陶冶』(1957)、(4)『職業陶冶、専門陶冶、人間陶冶』(1957)、論文集ともいえる(5)『東西対立の光に照らした学問と人間陶冶』(1958)、講演小冊子、(6)『現代的生活の諸力としての芸術と技術』(1959)、そして、最後の著作となった(7)『自由と生の秩序—民主主義の哲学と教育学について—』

(1962)である。ここでわれわれが1957年の論文、「われわれ自身この(原子力)時代をどのように理解してきたのか？」と内的関連の最も強いものと考えられる諸論文を吟味すると、以下の一連の諸論文があげられる。すなわち、1956年の論文：「組織化の時代における教育」[正確にはこれは当時の西ドイツの代表的教育学者による論文集、『教育は何のために(“Erziehung wozu?”)』に掲載された論文]⁹⁾、をはじめとして、講演：「事象化された世界における自由な人間」(1956)、さらに1956年の「哲学的人間学と現代の物理学」がその前段をなし、時局的論文と同年の1957年、「現今の時代の自己認識」が、さらに、論文：「原子力 (Atom) と倫理 (Ethik) —原子力の経済的、政治的、倫理的問題—」が「ドイツ・ヨーロッパ連合」編纂の講演集として刊行されている。続いて次年度1958年には、(西)ドイツ学術功労賞 (Orden pour le mérite für Wissenschaften und Künste)

の叙勲講演の記念論文として「学問の公的責任」があり、このテーマに関連する論文はほぼ終結する。だがリットの死の前年、つまり1961年の論文：「技術時代におけるヒューマニズムの遺産」[この論文は、チューリヒ・ペスタロッターアーヌムの編纂による『西洋教育の精神』所収の論文]、及び、死直前の1962年、国際シンポジウム：〈大学と現代世界〉所収の論文：「転換期における大学 (Die wissenschaftliche Hochschule in der Zeitenwende)」は、いずれも Th. リットが「現代」という歴史的時代に生きる人間や科学(学問)の問題に対して鋭い歴史意識に基づく批判的精神をもっていかに深く思索していたかを如実に示している。¹⁰⁾

2. 「時局論文」の思考と論理

結論的にいえば、この「時局論文」でリットは、「原子力時代」における「核エネルギーの利用に賛成か反対か」を述べているのではない。そこでは、ヨーロッパにおける自然科学の発展とその技術への応用プロセスが巨視的に鳥瞰され、これら発展過程の中で人間が発見し、それを技術に応用する人間の「思考 (das Denken)」とその人間によって創出された「技術 (die Technik)」それ自体がもつ「事象 (die Sache)」の法則が根本的に対立するものとして把握され、その「事象」がそれ自体の法則に従って、人間の思考と無関係に突き進む点にリットは原子力利用の危険の可能性の本質とその問題の根源を捉えているのである。何故に、「人間の思考」と「事象の法則」は対立するのか。以下、この問題の根源を Th. リットの思考ないし論理に沿って説明してみよう。

1) 自然諸科学における「原因 = 結果 = 諸関係」及び技術における「手段 = 目的 = 諸関係」の問題

Th. リットの重大関心事は、人間自身によって生み出された精密自然諸科学、および工業生産秩序の連関に直面して、われわれの時代の人間がどのような状況の中にあるのか、そして何故に陶冶(教育)作用の課題がこのような問題の分析から生じるのかという問いの原理的、歴史哲学的 = 倫理的 = 教育的論究であった。

自然科学と技術、自然科学的思考と技術的思考との関係について、リットのテーゼは、両者はきわめて密接に互いに関連しているだけではなく、特定の点で「まさしくひとつのもの」である。つまり、「自然科学は技術に続いて生じたり、技術から結果として出現するのでもない」¹¹⁾。両者は、「互いと共に、そして互いを通じて発展する」¹²⁾のである。リットはそれを「実験 (die Experiment)」¹³⁾を通じて説明する。すなわち、近代自然科学に固有な方法である「実験」は、人間と自然との間に非感覚的な中間項、つまり「仮説 (die Hypothese)」を挿入する点で、自然との「交わり」でなされる「試行 (die Ausprobieren)」とは区別されるべきものである。実験は自然の単なる観察ではなく、自然に対するひとつの行為である。実験が成功すれば、それによって「仮説 (die Hypothese)」が「検証 (verifizieren)」されるわけであるが、この仮説の検証に、研究者の実践的有用性の意図の有無とかかわりなく、すでに「実践への指示」が含まれている。というのも、実験が検証によって、たとえば、a という「原因」に基づいて、つねにかつ必然的に b という「結果」が生じることを教えるならば、逆に、b という「目的」を実現するためには、a という「手段」を投入すればよいことが明白だからである。リットが言うように「実験は理論的に先取された技術であり、技術は実践へと引き受けられた実験である」¹⁴⁾。かくしてリットは自然科学と技術の関係を次のように規定する。「自然科学は、その「応用」としてはじめて、技術を呼び起こすのではない。つまり、自然科学は、それ自身において、かつそれ自身として、すでに潜在的な技術である。逆に、技術は、無数に繰り返される自然科学の実験である」¹⁵⁾。もちろん、自然科学は技術ではなく、技術は自然科学でもない。両者はカテゴリー上、当然区別されなければならない。問題は、自然科学における「原因 = 結果」関係が、技術にあっては「手段 = 目的」関係に置き換えられることである。このことは、精密自然諸科学において「原因 = 結果 = 諸連関」として定式化されると同様な諸連関が、技術的に「手段 = 目的 = 諸連関」として「置き換え」られることである。では一体この「置換」は何故生起するのか？

リットによる技術的思考の特徴は、まさに自然科学的思考のように、厳密な事象的思考、すなわち、事象自体のもつ法則（性）に支配された思考である。つまり、両者は「事象の論理（die Logik der Sache）」によって支配されているのである。ただ両者の違いは、自然科学が「事象の認識」もしくは「事象の究明」に努めるのに対して、技術は「事象の加工（die Sachbearbeitung）」、あるいは「事象の利用（die Sachverwertung）」にその関心がある。それ故に技術は、「事象の利用を目指す実践」なのである。このように科学によって理論的に認識された「事象」は、技術によって「手段」へと変形、ないし転換され、「方法的に完成された形態に、そしてまばゆいばかりの成果に達するのである」¹⁶⁾。そこから、技術的思考の解決を得ようと努力する人間は、「事象の世界を…手段に考え直さねばならない」のである。しかしながら、手段はそれ自体としては価値を有してはいない。手段はつねに何ものかの手段である。つまり、『目的』があつての『手段』なのである。ここからリットにあつては、技術的に思考するということが、「手段—目的—相互連関」¹⁷⁾において思考することになる。ここに技術的思考の特徴と同時に、最大の問題が存するのである。つまり、技術は、事象の認識や究明にあるのではなく、事象に対する最大の加工（値）や最大の利用（値）を求めるのであり、最大の効用性を追求することこそがその目的なのである。それこそが、技術の「事象の論理」なのである。

リットの後期思想で重要な役割を演じるこの「事象（Sache）」という概念は、カント哲学における「人格（die Person）」に対立する概念として用いられていることにわれわれは注意したい。結論的に、リットは「事象」と「人格」の対立を人間の全体性の陶冶というレベルで問題の解決を図る。つまり、ヘーゲル学徒としてリットは、「弁証法」的思考でこの問題の解決を図るのである。

2) 問題解決の思考の方法としての弁証法

一般に、リットの弁証法は、ヘーゲルの「一極的弁証法」の思想的影響を受けながらも、リット自身が語るように、むしろ、J. コーン（Jonas Cohn）の「二極的弁証法（die bipolare Dialektik）」¹⁸⁾である。「二極弁証法」は最初から同じ価値を有する二つの契機が同

時に対立しつつ関連する弁証法である。すなわち、物質と精神、身体と精神、生命と理念、個人と社会、素質と環境等、幾多の二極の組織、「二元論の体系」の相互に浸透融合する弁証法である¹⁹⁾。

では、「事象」と「人格」の対立をリットの「二極弁証法」ではどのように解決するのか？結論的には、「事象（物質）」と「精神（人格）」が相互に浸透し融合する「相」、つまり「止揚（Aufheben）」する『次元』、それは問題解決の「場」でもあるが、リットは以下のように考えるのである。それは、同時に、今日、われわれが原子力時代の核エネルギーの問題解決の方向を考える筋道でもある。究極的にわれわれが、この対立をいかに「止揚」するか、解決するかの問題に Th. リットは論を展開するのであるが、その「止揚」の中核に最高価値である「責任（die Verantwortung）」をおいているのである。思うに、リットが「止揚」の中核に最高価値の「責任」を置くことによって、カント哲学者 W. ハイゼンベルクとヘーゲル哲学者リットとの「対話」が結実したと論者は考えている。すなわち、リットの場合、ヘーゲルの止揚される「対立」に対して、カントに倣い、止揚しえない人間本質に根ざす「二律背反（Ambivalenz）」の意味が強く現れているのである [ハイゼンベルクの論文、「研究者の責任について」（著書『部分と全体』、所収）では、社会的あるいはその規範に対する『応答』としての「相対的責任」が論じられている。尚、リットと対話を重ねた時期の論文としては「量子力学とカント哲学—1930—1932年」がある。同時に、リットとハイゼンベルクには、「現代物理学」の理解をめぐる根本的な差異が存在していたことも事実である（W. Heisenberg, 『現代物理学の自然像』（1958）。これらの諸点を考慮しながら、両者の「対話」の方向を探ることが問題解決には重要である。] 従って、リットによる「止揚」の本意は、「責任」というカテゴリーへ「決断」をフィードバックさせることであり、それが問題解決には不可欠なことであった。

3) 責任への「決断」と人間の思考

リットは「時局論文」（1957年）と同じ年に『技術的思考と人間陶冶』を刊行している（その序文の日付は1957年3月である。「時

局論文」の末尾には自書の参考文献を2点挙げているが、その自著の1点が『技術的思考と人間陶冶』であり、もう1点は『ドイツ古典主義の陶冶理想と現代の労働世界』（1955）である。従って、「時局論文」の思考の詳細は両著にあると言えよう。その中で、リットは印象深く、原子科学について語っているのである。若干長いが以下引用する。「原子科学によって、われわれは、諸力を自由に使用することが出来るようになり、この諸力の自由な使用は、われわれに一方では諸力の軍事的投入によって、人類を地上から抹殺する可能性を与えるとともに、他方では、諸力の科学的利用によって、われわれ人類の生活の幸福に緊急に必要な改善を施す可能性をも与えてくれた。（それは）存在かあるいは無かである。世界の事象化の究極的な諸成果を通じて人類は、この問いの前に立たされているのである」²⁰⁾。だが、事象化され究極的な諸成果を得た世界においては「存在か無か」のいずれかを選択する可能性すら人類にはほとんど考えられない、ということである。そのような人類存在の絶望的状况に直面して、われわれ人類はなお何ができるのか、あるいは何をなさねばならぬのか。結局、事象に注目し、事象に献身した果てに悲劇を体験した人間の心に浮かぶのは、それでもやはり、人間自身の固有な存在（個（Person）としての生）が問題であるということである。すなわち、世界を理論的かつ実践的に事象化しようと最大の努力を果した末に、人間は〈決断〉へと呼びかけられた存在であり、生活が決断の中で形成される存在であるということに気づくのである。それは一体どういうことか。事象の論理の持つ『手段—目的—連関』の世界でいかに人間の便利さ、豊かさを追求しても、別の次元、つまり、人間の生命の論理である『目的—手段—連関』を「止揚」する次元、つまり責任への〈決断〉を主体的に〈選択する〉「意志」の次元にフィードバックさせなくては問題の根本的解決には至らないということである。われわれは世界の事象化によって逆に、人間は自由へと開放された存在であることを強く自覚する。事象化が最大かつ強固なものであればあるほど、主体的に決断する〈自由〉の選択への意志がさらに強固になる。まさに、それは人間的生の持つ「二律背反（die Ambivalenz）」なのである。リッ

トは「人間は、アンビバレンツという運命を背負った存在であり…人間は絶えず、自己自身を失う危険にさらされており、それ故、この危険に対処すべくいつも注意を張り巡らせていることが必要な存在である」²¹⁾とも述べている。同時に、この「二律背反」は、リットの場合、「事象解明」にも見られるものである。事象解明によって形成されたその同じ手段は、人間に全く逆の利用方法を可能にする。ひとつの根から発生した幸福と災いが生じる。ここでもリットはアンビバレンツの本質と作用の具体を「原子力時代」の人類にも見ている。「事象解明によって形成されたその同じ手段は、人間に全く逆の利用方法を可能にする。…ひとつの根から発生した幸福と災い」。このアンビバレンツの本質と作用は、リットによれば、「原子時代」の人類が同じ程度に「救済をもたらすものであると同時に、破壊的なものでもある作用力の供給によってあわせて規定されていた」²²⁾と。その根源的には、人間がいつも善と悪、あるべきものとあるべからざるものとの岐路に立たされる「両義性」、「二面性」をもつ存在であるからだ。

「原子力時代」の労働構造はまさしく、「事象の法則」の命令に従い構成された構造であり、それはリットの表現では、あきらかに「悪に誘惑する（versucherisch）」²³⁾という語の最も深い意味で意図されたものを内在している「構造」なのである。これらの認識によって始めて、われわれは現代の労働体制の秩序の持つ最も深い〈不安〉の根拠に肉薄できるのである。この「悪への誘惑」に対して、警戒し、用心し、見張りを必要とする存在、それが人間なのである。その上で、リットは人間存在の「両義性」に起因するその「生のアンチノミー（二律背反）」を背負う人間がその現存在を通して巻き込まれていく混乱、危機、すなわち人間性への脅威を処理、救済、解決するには、ヘーゲルが言う「思考的倫理性（die denkende Sittlichkeit）」²⁴⁾の力なしには処理できない、解決できないと結論づけている。その「思考的倫理性」こそ、原子力時代に生きる最大の「責任」を引き受ける「決断」を導く力ではなかろうか。これらの文脈からもこの「思考的倫理性」の力の形成こそが、まさに「人間陶冶」（人間形成）最大の課題なのである。

まとめ

以上のようなリットによる原子力時代の理解から得られた「技術的思考」の本質やその根源的問題は、はしなくも、2011年3月11日、福島第一原発事故として悲劇的な形でわれわれの眼前で生じた。まさに「目もくらむような」数的最高値の核エネルギーが原子核の有する『事象の法則』に即して、研究者を含むわれわれ人間の意志とは無関係に進行、暴走したのである。それは事象利用の「最大の効果、最大の有用性」にのみ関心を集中させる技術的思考（意志）の悲劇でもあるのだ！ それはまた、原発の「安全神話」を技術的思考に依拠し、形成してきた日本社会の悲劇でもある。その技術的思考やその支配に基づく実践の根本的問題を半世紀も前に警告していた Th. リットは「時代に対する鋭い歴史意識を有していた」と判断し、評価してもよからう。ただ、学術的な「自然科学論」や「技術論」の探求や考察には、同時代のカール・ヤスパース (K. Jaspers) やマルチン・ハイデガー (M. Heidegger)、更には、わが国では三木清 等の「技術論」との比較検討が必要であろう。同時に、自然科学と人間陶冶をめぐる Th. リットと W. ハイゼンベルクの差異、それに起因する「古典物理学」と「現代物理学」の把握の相違等、根本的な探求が必要である。これらの問題に関しては、R. ラサーンの論文、'Wissenschaft als das wache Gewissen der Nation. Theodor Litts Auseinandersetzung mit den Marxismus', in: Theodor-Litt-Jahrbuch (2002/2, s. s. 37-64) が参考になる。

Th. リット (1880~1962) は、数奇な運命を辿った20世紀を代表する歴史感覚の鋭い哲学者、教育学者であった。ヒトラー体制の中で学長職 (1931-32) を勤めるが、その指導者の「人種観」や「歴史意識」を学問的に痛烈に批判し、学長職を辞し、結局、1937年自発的に退

職しているのである。そして、第二次大戦後の1945年復職し、ライプチヒ大学の再興を計るため『復興計画案』まで作成するも、これまたソヴィエト占領下の全体主義的政策とは全く相容れないもので、自主的に退職し、1947年、故郷の旧西ドイツ・ボン大学に招聘され、「教育科学研究所」を整備することになる。今日リットに対する思想家としての評価は、保守主義的な思想家ではあるが、ナチスに節を曲げなかった潔さは、戦後のドイツでは「学者として範をなす」ものとされているし、人間理性を武器にしたその鋭い歴史＝批判的精神は「時代を見抜くもの」として高く評価されている。なお、リットのライプチヒ時代の1920年代には、その後日本の代表的な教育学者、心理学者になる面々が留学している。広島文理科大学教授で学長を務め、占領下の困難な状況のなかで『原爆の子』を編集、刊行した長田 新、東京帝国大学教授入澤宗壽、そして心理学者城戸幡太郎等々²⁵⁾、若いリットから文化哲学的問題、教育学の方法論を学んでいる。今、ライプチヒ大学はリット研究所を中心に、ドイツにおける「精神科学研究」のセンターを目指して、ネットワークを形成中である。そこには大学創立600余年の伝統と Th. リット、解釈学の巨匠 H. -G. ガダマー (H. -G. Gadamer, 1900-2002)、そして W. ハイゼンベルク等を中心とする激動の時代を透徹した思想、理論によって探求した知的証言を学問的に評価する作業が着実に進行中である。

論者は今回のテーマ、「われわれ自身、『原子力時代』をどのように理解してきたのか？」を、わが国の3.11の東北大震災、とりわけ、福島第一原発事故を念頭に対峙せざるをえなかった。ヒロシマという原爆の大惨事を被った土地で教育を受け、その後教育や研究に従事してきた一人の人間として、この問題に真正面から対峙したことがあったのか？ と。慚愧の念で一杯である。今、われわれに必要なことは、それぞれのおかれた立場で、例えば、研究者の場合、自分の所属する学会で「われわれ自身、『原子力時代』をどのように理解してきたのか？」を問い、その反省の上に立って、その研究者の主体性において「人間が発見し、発明してきた核エネルギーの事象 (連関構造)」を専門家の説明に敬意をはらいながら傾聴し、それを十分に吟味し、自己の責任において、「人間の思考によってどこまで解明されているのか」、「それは人間の思考によっては解明され得ないものなのか」

を「論理（ロゴス）」に徹して冷静にかつ徹底的に考え抜くことである。その上で、われわれは、人類に対する最大の「責任」を引き受ける「決断」が必要なのではないか。同時に、このような「決断」を広島—長崎—福島の時空で世界に発信することが、われわれにはいま、世界から求められている。

注および参考文献

- 1) Litt, Theodor, 'Wie versteht unser Zeitalter sich selbst?', in: Schicksalsfragen der Gegenwart-Handbuch; politisch-historischer Bildung, Hrsg. von Bundesministerium für Verteidigung, Erster Band, Max Niemeyer Verlag/Tübingen, 1957, ss. 9-28.
- 2) W. ハイゼンベルク, 湯川秀樹序, 山崎和夫訳『部分と全体—私の生涯の偉大な出会いと対話』, みすず書房, 1974, pp. 310-311. 参照。原書は Piper 版, Werner Heisenberg, "Der Teil und das Ganze", 1969.
- 3) Ortmeier, Benjamin, "Mythos und Pathos statt Logos und Ethos", Beltz, 2009. の書名から, 特に, 'Das Beispiel Theodor Litt', ss. 163-166. を参照し, 引用。
- 4) A. グロセール, 山本・三島・相良・鈴木訳『ドイツ総決算—1945以降のドイツ現代史 (Deutschlandbilanz —Geschichte Deutschlands seit 1945)』, 社会思想社, 1981, 特に, 年表と第11章「外交と国際政治」参照。
- 5) F.J. Strauss, 'Zum Geleit', in: Schicksalsfragen der Gegenwart-Handbuch; politische-historischer Bildung, Hrsg., von Bundesministerium für Verteidigung, Erster Band, Max Niemeyer Verlag/Tübingen, 1957, s. 7.
- 6) ドイツの再軍備問題は, 1945年2月11日の米英ソ首脳のヤルタ会談でのドイツ分割占領の決議から同年, 5月7~8日のドイツ国防軍の無条件降伏調印によって戦闘行為は終結するが, 米英仏占領地域とソ連の占領地域の対立, 所謂, 東西の「冷戦」対立によって錯綜を極めた。結局, 1949年5月8日, ドイツ連邦共和国基本法が可決され, それを西側三ヵ国軍政府がこれを承認 (5.12), 5月24日発効。これに対して,
- ソ連の占領地域でも, 同年, 10月7日ドイツ民主共和国憲法発効, 軍政が民政に移管した。結局, 西ドイツ軍の創設は, 1950年9月26日, NATO 理事会でヨーロッパ統一軍の創設が決議され, NATO への編入決定によるものである。著者 A. グロセールは「再軍備をめぐる争いは, 長い, 激しい, ひどく紛糾したものであった」し, 「再軍備が準備された状況は当然ながら異常であった」と記している。上掲書, p. 331, 及び p. 373.
- 7) 荒井 武, 「解説」, Th. リット著, 荒井, 前田訳, 『現代社会と教育の理念』, 福村出版, 1988. 尚, 原著名は, "Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt". (『ドイツ古典主義の陶冶思想と現代の労働世界』) である。
- 8) 宮野安治は, その著『リットの人間学と教育学—人間と自然の関係をめぐって—』 (2006) において, 世界のリット研究の動向にも目配りしながら, 「ナチス期を境に, リット思想全体を「前期」と「後期」に二分し, その間にある意味で質的な非連続が存在することを認めざるをえない」と述べている。その上で, 「本著は, 後期リットに照明をあて, その哲学的人間学およびそれに基づいた人間陶冶論の内容を, とりわけ「人間と自然の関係」という問題関心を軸に明らかにし, そこに生じている問題について検討を試みることをねらいとしている」(p. 10.) と記している。その意味でも本著はリットの「時局論文」の内容の解明に多くの情報を提供してくれるし, 示唆をあたえてくれる。以下本論では, 本著を参照し, 多くの引用をしている。
- 9) Th. リット, 「組織化の時代における教育」, 杉谷, 溝川訳『新しい教育の探求』, 所収 (原著名, "Erziehung wozu? —Die pädagogische Probleme der Gegenwart—"), 明治図書, 1961. pp. 119-132.
- 10) 当時の Th. リットの歴史意識の特徴を示す一例として論文, 「歴史の意味の自己特殊化」, ライニッシュ編, 田中元訳『歴史とは何か—歴史の意味—』, 理想社, 1967. pp. 86-108. がある。尚, 本原書は, ドイツ・バイエルン放送が1961年1月から2月にかけて当代の代表的な歴史家, 哲学者, 宗教家, 聖書学者7名を集め, ラジオ放送によ

- る連続講演をまとめたものである。グローマン, ルドルフ・ブルトマン, アーノルド・トインビー, カール・ポパー等, そうそうたるメンバーである。
- 11) Th.Litt, "Naturwissenschaft und Menschenbildung", 1948, s. 61.
 - 12) Th.Litt, "Das Bildungsideal der deutschen Klassik und moderne Arbeitswelt", 1955, s. 14.
 - 13) ditto, s. 86.
 - 14) Th.Litt, "Naturwissnschaft und Menschenbildung", 1948, s. 61.
 - 15) 宮野安治, 上掲書, p. 205. 参照。
 - 16) Th. リット, 小笠原訳, 『技術的思考と人間陶冶』, 玉川大学出版社, 1996, p. 52.
 - 17) 上掲書, p. 84.
 - 18) J. Cohn, "Theorie der Dialektik", 1923, s. 256.
 - 19) 杉谷雅文, 『現代哲学と教育学』, 柳原書店, 1954, pp. 116-117.
 - 20) Th. リット, 小笠原訳, 『技術的思考と人間陶冶』, 玉川大学出版部, 1996, p. 106.
 - 21) 上掲書, p. 107.
 - 22) 上掲書, p. 106.
 - 23) Th.Litt, "Technisches Denken und menschliche Bildung", 1957, s. 63.
 - 24) ditto, s. 96.
 - 25) 長田 新, 「リット教授のこと」, 『独逸だより—再遊記』, 目黒書店, 1931, pp. 198-207. 尚, 戦後の1953年6月, 稲富栄次郎(上智大学教授, 元広島文理科大学教授, 初代教育哲学会長)は, ボン大学でTh. リットの講演; 『独逸の大学とギムナジウム』(6月3日)を聴講し, また講義; 「自然科学的認識について」にも出席し, その後直接教授と会見(6月16日)し, その印象を記している。「ドイツ大学の現状—リット教授との会見—」, 上智大学編『大学とヒューマニズム』, (ソフィア叢書1), 創文社, 1953, pp. 243-246. 及び, 「リット教授の想いで」, 教育哲学会編『教育哲学研究』, 第8号, 1963, pp. 121-123.